中国語教育における中国文化紹介の試み

An Experiment of Introduction to Chinese Culture at the Chinese Language Education

小川　快之

１、はじめに

初級中国語の授業を行う際には、学生にまず中国語や中国に関心をもってもらい、そしてさらに、中国語が育まれた文化的背景（中国文化）について理解を深めてもらうこと、つまり、語学教育と文化紹介を連動させる工夫が取り組むべき重要な課題の一つとなっている(1)。また、現実問題として、中国の生活文化をよく理解していないと円滑に中国語を運用できず、その結果、現地の人々とのコミュニケーションに支障が生じるという問題もある(2)。こうした課題に対しては、すでに多くの教師がさまざまな試みを行ってきた。そして、授業の工夫として、中国の食文化の紹介や中国語の歌・中国（台湾）映画を活用した授業などが行われてきた(3)。ただ、そうした授業の工夫の内容や意義、具体的効果、課題などについて検討・考察した研究は、古川典代氏の研究などがあるものの、まだ少ないように感じられる。こうした授業の工夫は、言語学習（文法・語彙等の学習）というよりは授業方法（授業のやり方）的なことではあるが、より教育的効果のある授業を行うためには、その内容について再検証してみる作業も必要であると思われる(4)。そこで本報告では、以上のような授業の工夫とその有効性について再検証し、より教育的効果のある授業方法を探求する作業の一環として、筆者が担当している千葉大学普遍教育・初修外国語（中国語）において行った試みとその学生に対する影響について述べてみたい。

２、初修外国語（中国語）の授業について

まず、筆者が担当している初修外国語（中国語）の授業自体の概要について説明しておきたい。この授業では基本的に初修外国語（中国語）共通の指定教科書『話したくなる中国語』（周飛帆・田口善久・橋本雄一・韓越著、朝日出版社）を使って、基礎的な文法事項（１年間学習すると中国語検定４級に対応できる内容）と教科書本文（対話文）をもとにした基礎的かつ実用的な会話の習得などを目標とした教育を行っている。授業の実施回数は、週２回で、このうち１回を中国人教員が担当し、１回を筆者が担当している。基礎発音教育は、中国人教員と筆者が共同で行っているが、会話文・文法学習の段階に入ると、中国人教員が主に会話教育を、筆者が主に文法教育（応用作文練習等も含む）を担当している。ただ、以上の分担は大まかなもので、担当教員同士がつねに連携しながら、学生の学習状況に即した教育を行っている。2008年度の学生数は、前期が29名、後期が14名である。教育学部の学生が多いが、工学部や医学部の学生も参加している（なお、教育学部で

は本授業を自由選択としている)。以下で述べる試みは、筆者の2008年度の授業において行ったものである。

3、中国の食文化の紹介について

まず、中国の食文化の紹介に関連した授業内容について述べてみたい。本授業では、筆者が以下のような中国の食文化に関するプリントを作成して使用してみた(5)。以下で資料にあげるプリントの現物は全て筆者の手書きで、文字にはピンイン（表音文字）がついている。また、資料①と②には地図と絵が書かれている。

［資料①］自作プリント「飲み物（饮料）について」

中国各地でよく飲まれているお茶には違いがあります。また、中国では冷たい飲み物が好まれない傾向があります（体に悪いとして）。 （花茶）＝ジャスミンなどの花の香りをつけたお茶。（茉莉花茶）＝ジャスミン茶→北京周辺など。（绿茶）＝緑茶→上海周辺など。（乌龙茶）＝ウーロン茶→台湾など。（普洱茶）＝プーアル茶（雲南省の普洱でとれるお茶）→香港など。
好喝吗?((飲み物が）おいしいですか？) ⇒（很）好喝。((とても）おいしいです)。不好喝。(おいしくないです)。

［資料②］自作プリント「中国料理（中国菜）について」

中国料理には、気候風土の違いにより、さまざまな料理があります。おおまかに言って四つの料理に分けることができます。
（北京菜）＝京菜：北京料理。味が濃厚で油っこいのが特徴。（北京烤鸭）＝北京ダックや（涮羊肉）＝羊肉のしゃぶしゃぶが有名。 （上海菜）＝沪菜：上海料理。甘く濃厚な味が特徴。川魚料理が多い。（大闸蟹）＝上海ガニが有名（←湖でとれるカニ）。 （四川菜）＝川菜：四川料理。ぴりっと辛いのが特徴。（麻婆豆腐）が有名。 （广东菜）＝粤菜：広東料理。あっさりとした味つけが特徴。使われる材料が豊富。魚介類を使った料理が多い。お茶を飲みながら各種の軽食・お菓子＝（点心）を食べるという食事の仕方＝（饮茶）＝飲茶（ヤムチャ←広東語）や、（粥）＝おかゆが有名。

授業の際には、内容について説明しながら、単語の発音練習を行った。なお、上記の資料を見ると分かるように、食文化に関する説明では、中国が多様な地域性をもっていること、単純に「中国は…」と言えないことや日中間での生活習慣の違い（例えば「一般的に中国人は冷たい飲み物は飲まない」など）にも力点をおいた。学生に、食文化を通じて、中国文化や日中間の文化の違いについて理解を深めてもらえるように工夫をした。

また、こうした食文化の紹介と関連させて、以下のような買い物やレストランでの会話に関する実用会話プリントも作成して使用した。

［資料③］自作プリント「実用会話・買い物」

	日本語訳
A：有苹果吗?	A：リンゴはありますか？
B：有。(没有)。	B：あります。(ありません)。
A：这个苹果多少钱?	A：このリンゴはいくらですか？
B：两块。	B：二元です。
A：我要两个。	A：二つください（私は二つ欲しいです)。
B：一共四块。	B：全部で四元です。
西瓜 馒头 橘子	スイカ　蒸しパン　ミカン

［資料④］自作プリント「実用会話・レストランにて」

	日本語訳
A：您要什么?	A：何になさいますか（あなたは何が欲しいですか）？
B：我要一个杏仁豆腐。	B：アンニン豆腐を一つください（私は一つアンニン豆腐が欲しいです)。
A：好。	A：かしこまりました。
干烧虾仁	エビのチリソース（エビチリ）
青椒肉丝	ピーマンと肉の細切り炒め
炒饭 面条 饺子	チャーハン　めん類　ギョーザ
包子 古老肉 杏仁豆腐	肉まん　酢豚　アンニン豆腐
请给我看看菜单。	メニューを（私に）みせてください。

授業では、このプリントを半分に折って使用した。また、授業の際には、発音練習をした後、まず、中国語の部分を見ながら、学生全員に２人１組で順番に会話練習をしてもらった。さらに、その作業にある程度慣れた段階では、日本語訳だけをみて同じような会話をする練習をしてもらった。また、これらのプリントを使用する場合は、物や数字を入れ替えて会話をしてもらった。

以上の授業に対する学生の反応についてであるが、料理の名前に興味をもつ学生が多い。また、実用会話は、買い物やレストランで実際に使える会話文なので、学生が積極的に学習する場合が多い。前期最後の授業で「授業で学んだ内容の中で関心・興味をもったこと」について学生にアンケートを行ったところ、35％（10名）の学生が中国の食文化に関心をもったと回答している。例えば、「料理の名前の中に、日本で普段食べている中華料理と同じものと異なるものがあったこと（に興味をもった)」などの感想が寄せられた。こうしたことを考えると、一定の教育的効果があったことが窺える。

４、中国語の歌の活用について

つぎに、中国語の歌を活用した授業内容について述べてみたい。本授業では最初に中国民謡「太湖船」(6)を紹介した。具体的には、自作のピンイン・語彙説明つきの歌詞プリントを配布し、発音練習をして、歌（CD）を１回聴いてもらった上で、歌を聴きながら１回歌う練習をしてもらい、その後、何回か全員で（伴奏なしで）合唱するといった手順で授業を行った。そして、次の授業でもう１度歌を聴きながら歌う練習と（伴奏なしの）合唱練習を行った。また、それ以降の授業でも適宜（伴奏なしの）合唱練習を行った。さらに、同様な方式でテレサ・テン（鄧麗君）の「小城故事（小さなまちの物語）」(7)やアンジェラ・チャン（張韶涵）の「隠形的翅膀（透明の翼）」(8)等の流行歌なども紹介・練習した。なお、歌の選定にあたっては、「歌いやすいこと」「中国・台湾でよく知られている歌であること（そうでないと中国人と交流する際にあまり役に立たないため）」に留意した。

こうした中国語の歌を活用した授業に対する学生の関心は非常に高く、学生の多くが積極的に練習に取り組んでいたので、合唱が十分可能な状態となった。前期最後の授業で行ったアンケートでは、76％（22名）の学生が、中国語の歌に関心をもったと回答している。例えば、「歌は普段聴く機会がないのでよかったです」「歌うことを通して中国語を理解できたことはすごく楽しかったです」「歌は難しい単語が多いですが、覚えやすく、楽しく覚えられて良かったです」「中国語の歌はとても発音練習に良かったと思う」などの感想が寄せられた。また、筆者が担当している法政大学の授業（「中国語表現」：学生数32名）でも同様な授業を行ったが、2008年度前期の学生の授業評価アンケートでは、「歌なども入れて中国語になじみやすくしてくれた」といった内容の意見が複数寄せられ、授業評価結果の「授業内容に対する興味」に関する項目は、4.22点（５点満点）で、語学平均（3.93点）を上回った。このように別大学の授業でも一定の効果が窺えることもあわせて考えると、（従来から有用性が指摘されていた）歌の活用という工夫が、やはり一定の教育的効果を有していることが具体的に再確認できる。ただ、まだ筆者が検証した例が少なく、選曲等今後工夫すべき点も多いので、その確かな有効性を実証するためには、上記の内容を基礎として、今後さらに検証作業を進める必要がある。

なお、中国語の歌の学習については、学生の中国文化に対する関心を高め、親近感を向上させるだけではなく、上記のアンケートで学生も指摘しているように、発音やピンインの習得にも効果があると考えられるが、今回の授業では、こうした点について工夫や具体的な検証があまりできなかった。今後、歌の活用と言語学習との関連について、さらに工夫を重ねながら検証する作業が必要であると思われる。

５、おわりに

以上、本報告では、筆者が担当している初修外国語（中国語）の授業における中国文化紹介の試みについて述べてきた。これらの試み全体に対する学生の評価についてであるが、千葉大学普遍教育センターが実施している2008年度前期の授業評価アンケートでは、「授業内容に対する興味・関心」や「知的刺激」「中国の社会・文化に対する親近感の向上」

に関する項目の点数が科目種別の平均点より高い数値を示している。例えば、「授業内容に対する興味・関心」に関する項目は、4.36点（平均：4.00点）で、「非常にあった」と「あった」をあわせると92％になっている。また、「知的刺激」に関する項目は、4.24点（平均：3.80点）で、「かなり視野が広がった」と「広がった」をあわせると84％になっている。さらに、「中国の社会・文化に対する親近感の向上」に関する項目は、4.25点（平均：3.72点）で、「非常に身近に感じるようになった」と「身近に感じるようになった」をあわせると83％になっている(9)。これらのこと及び前述した本授業で筆者が行ったアンケートの結果を総合して考えると、食文化の紹介や歌を活用した授業というものが、学生の中国語や中国に対する関心を高めるという点に関して、ある程度の教育的効果を有することが具体的に再確認できる。しかし、本報告は2008年度の結果しか踏まえていないので、こうした授業の工夫がどこまで有効性をもつものなのかということについて確かめるためには、さらに検証作業を進めてゆく必要があると思われる。また、近年、多くの研究者により、大学における中国語教育の教授内容（文法・語彙学習の内容）が未だ曖昧で多くの課題を抱えていることについて指摘がなされているが(10)、こうした中国文化紹介に関する授業の工夫がそうした教授内容とどのように連動するのかという点についても今後考察してみる余地があるように思われる。

なお、本報告の内容は、検証例も少なく、初歩的かつ未熟な試みといったものにすぎないが、今回あえて授業報告として文章にまとめたのは、こうした授業の工夫を今後さらに改善発展させるためには、第三者の方々からのご教示が必要であると考えたからである。読者の方々のご指導を賜れれば幸甚である。

註

（１） 犬塚優司・陳仲奇・邱燕凌「総合政策学における中国語教育」（『総合政策論叢〈島根県立大学〉』13、2007年）等参照。

（２） 趙賢州「論外語教学与文化導入―兼論教学模式―」（『外国語科研究紀要〈東京大学教養学部〉』40－５、1992年）や洪潔清「中国語教育における文化紹介の必要性」（『新島学園女子短期大学紀要』21、2001年）が、こうした問題も踏まえて、中国語の授業における文化紹介の必要性について詳しく述べている。卑近な例としては、中国語では、通常、食事をする時に「いただきます」は言わないといったことがある。日本語の「いただきます」を中国語に訳した言葉を中国で使った場合、不自然な感じになると思われる（『中国ってこんな国！―素顔の‘漢流’生活―』、池上貞子・張国璐著、朝日出版社、第２課等参照）。なお、こうした問題を考える際に参考になるものとして、田島英一『「中国人」という生き方』（集英社新書、2001年）等がある。

（３） 食文化に関しては、『料理で学ぶオイシイ中国語』（古川典代・福冨奈津子著、朝日出版社）や『中国歴史文化風俗』（金丸邦三・呉悦著、白水社）等の教科書が詳しく触れている。歌や映画については、古川典代「ソフトアプローチの中国語教育法―歌や映画・ドラマなどを素材として」（『中国語教育』２、2004年）、俞稔生「中国語教育にお

ける中国の歌の効用について―中国語の歌的要素を発音練習に取り入れる試み―」（『現代社会学部紀要〈長崎ウエスレヤン大学〉』５－１、2007年）等が考察をしており、『高校生からの中国語』（小渓教材研究チーム編著、白帝社）等のように中国語の歌を組み入れている教科書もある。なお、古川氏には『中国語で歌おう！決定版テレサ・テン編』（アルク、2008年）など歌紹介の著作もある。また、伊藤真「高等学校における外国語の歌の取り扱いに関する考察―中国語の歌を用いた授業を例に―」（『中等教育研究紀要〈広島大学〉』45、2005年）も、授業での歌の活用を考える上で参考になる。語学授業における映画の導入は、英語教育では活発に行われており、映画英語教育学会が、映画メディアと語学教育の連動について調査研究を行っている。

（４） 古川氏は、前掲論文の中で、歌などソフトアプローチによる中国語教育法の有用性や必要性について詳しく述べている。なお、筆者は、企画運営に携わった特別授業について考察したことがある（拙稿「授業の工夫（15）京劇紹介の試み」『小溪―「高校中国語教育」の流れをつくる』38、財団法人国際文化フォーラム、2008年）。

（５） これらの教材を作成するにあたっては、遠藤紹徳『グルメ中国語』（国書刊行会、1987年）や『中国語学習ハンドブック』（大修館書店、1988年）第２部３食生活、布目潮渢『中国名茶紀行』（新潮選書、1991年）等を参照した。なお、料理の分類（菜系）については幾つかの説がある。また、周達生氏は『世界の食文化②中国』（農山漁村文化協会、2004年）で「菜系」は固定的に考えるべきではないと指摘している。

（６） サントリーウーロン茶のCMに使用されて有名になった歌で、『烏龍歌集』（東芝EMI株式会社、1998年）や前掲『高校生からの中国語』に収録されている。

（７） 呉越華『CD付　覚えておきたい中国語の歌』（中経出版、2005年）等参照。

（８） アンジェラ・チャンは、1982年生まれの台湾出身の女性歌手。その代表曲である「隠形的翅膀」は、台湾だけではなく中国でも流行した歌である。

（９） 本報告で述べた授業の工夫を、本格的に導入してはいなかった2007年度前期の授業の授業評価アンケート結果の「中国の社会・文化に対する親近感の向上」に関する項目は3.09点で、科目種別平均（3.65点）を下回っている。単純に比較はできないが、この数値が導入後は4.25点となっていることを考えるとその教育的効果はやはりある程度はあったように感じられる。なお、2008年度前期の授業評価アンケート結果の「総合評価」に関する項目は、4.52点で、科目種別平均（4.05点）より高く、「非常によかった」が60％で、それに「よかった」をあわせると92％となっている。

（10） 輿水優『中国語の教え方・学び方―中国語科教育法概説―』（日本大学文理学部、2005年、発売：冨山房インターナショナル）、町田茂「中国語教育と教材開発の課題」（『教育実践学研究〈山梨大学〉』９、2004年）等参照。

［追記］本報告の中国語の歌を導入した授業を実施するにあたっては、李林静氏（千葉大学非常勤講師）に色々とご助言ご協力頂いた。